

町民文芸



只見短歌会 令和四年二月詠草

居住棟の廊下に冬越す草や花日毎かわるを楽しみ眺む
馬場 八智

豪雪の正月ひと日晴れ間見ゆ冬場に白き桜木映ゆる
関谷登美子

ざらざらの婆の手がいいと我に寄る孫の柔き背搔かず撫でやる
目黒 富子

枕花活けゐるこの手の震へをり故人は母の古き友ゆゑ
新国由紀子

豪雪で大量に積もる屋根の上落雪注意の日毎流るる
渡部ヨリ子

幾度もくり返し読む主治医書きし謙虚な人柄サロンのページ
新国 洋子

(出詠順)



只見俳句会 二月定例会

日高俊平太 指導

友越して雪の更地の広々と
川向かい家並を隠し雪の嵩
弘子

浅草嶺深雪を溶かす球児達
薄暗き雛の座敷を全開す
一穂

家中に孫の気配の三日かな
豪雪やライントークのにぎやかに
一恵

青空を一気に裂いて屋根の雪
障子越えパソコン照らす朝日かな
修一

雪原と夕日に終わるわがひと日
雪の峰仰ぎて朝のコーヒーを
真理子

瞽女越えし峰の風巻か窓を打つ
大寒波底を音なく只見川
幸生

小正月行事田植豆植雪の上
いつの日か正月料理も忘れ去り
睦子

梅の香も風に漂う散歩かな
受験生コーヒー片手に黙々と
信

新たななるわれの思いも初鏡
寒雷落つ雪の庇と共鳴し
紺青

子供等は学校始めの顔となる
七草の名前指折る園児かな
都

沼の平山一面の福寿草
流燈の川を流るる御霊かな
妙子

ふるさとの屋根はまんまる雪の夜
雪ふりて又雪ふりて六地藏
浩子

寒晴やいつの間に消ゆ偏頭痛
逢いにゆくコートかすかに防虫剤
礼

風花をじっと見つめる吾子が手に
謹しみて病後の夫の年酒かな
味代子